

# みづゑ 第九

明治三十九年三月三日發兌

## 鉛筆畫について

△物を描くには種々なる材料あれど、尤も輕便なるは鉛筆なり。物の輪廓は線によつて現はすもの故、其點より見るも鉛筆畫の研究は必要なり。

△繪の第一歩は線なり。線を別つて直線と曲線との二つとす。而して天然物は總て曲線より成り、人造物には概して直線多し。

△美の要素を多く含めるは曲線にして、天然の美なるは物皆曲線より成立すればなり。

△直線は人の眼に入り易し、即ち曲線より成れる眼に反對すればなり。

△人の注意を惹かんとする時、印ち廣告などの圖案には多く直線を用ふれば、目的を達し得べし。

△直線は平易、曲線は複雑。是を色料に譬ふれば、直線は赤や緑の如く單純なるものにして、曲線は茶や鼠の如く澁きものなり。

△文明の建築は多く曲線より成り、野蠻のそれは直線に限らる。希臘、埃及の建築には殆ど直線を見す。日本の建築にも様式の進みたる神社、佛閣の如きものには圓柱、欄干等に曲線美を見出すべし。

△繪を學ぶにも直線より曲線に入るは順序なり。兒童の片假名より平假名に移るが如し。

△西洋畫の教へ方は曲線を畫くにも直線よりす。假令は圓を描かんとするには、最初に直線にて四角を作り、其中に對角線を引て中心を作り、更に四角を八角にし、十六角にし、三十二角にし、而して後圓形なる曲線

を作るなり。

△故に今一の花を寫さんとせば、初めより花瓣の形などを曲線にて寫さず、角々を捕へて直線にて五角形なり八角形なりを作り、夫を漸々圓味をつけて曲線に直すべく、かくすれば容易に實形を摸し得べし。

△物の輪廓を畫く時此方法を用ふれば、自然後にゴムにて消さればなちぬ線の多くを生ずべし、これを虚線といふ。虚線は物の形を正確に寫すといふ目的を達する爲めには多く畫くも不可なし。

△虚線はなるべく軽く淡く畫かざれば後に畫面を汚す憂あり。或人は輪廓の時は二本の指にて鉛筆を持つといふ。夫にも及ばざれど、兎に角淡く畫きおく時は後に消し去るに都合よきは勿論なり。

△次には明暗なるが『光線なければ繪なし』といふ如く輪廓に次て大切なるものなり。

△明暗即ち鉛筆畫に於ける濃淡は、物に奥行をつけるに欠くべからざるものなり。而して濃淡の度を通常五つに區別す。

1 高照 2 半明 3 中位 4 半暗 5 陰影

△高照とは尤も強き光部を指す。人の顔なれば眼中の如し。ビール罎の一角の白く見ゆるも同し例なり。

△半明とはそれに隣する明るさにて、中位とは讀て字の如し、半暗は中位より暗く、影陰とは尤も暗き部分を目指すなり。

△一の線にて明暗を別つには、光線の來れる方を細くし、陰の方を太くすべし。

△線と濃淡、これさへ自由に畫き得れば、鉛筆一本にて如何なる物の形をも充分に説明し得べし。

△鉛筆の持方は種々あれと、通例四十五度の角度に持つを便利とす。

△鉛筆の削り方は鋭利なるナイフにて三角位ひに削りとるを便とす。尖を細く丸くするは不可なり。そして使用の際は尖を廻すとなく、常に平たき太き面と細く鋭き面とを有するやうにし、一々ナイフを用ひずしていつにても細くも濃くも線を引き得るやうに用意されたし。

△教師なくして臨本を摸す時は、自己の眼は正しからざるもの故、其正否を見るには、光に透して裏面より見て臨本と比較する時は誤れる點を見出し得べし。

△臨畫中畫板を上下左右に廻すとは避けざるべからず。夫故臨本を摸す場合には、左の上部より筆を着けて右の下隅に終るべきなり。かくする時は畫面の汚るるとなかるべし。

△寫生の際は一部分より仕上げるといふ方法は不可なり。目的物より寫し始め、而して最後は尤も黒き陰影に終るべし。

(以上水彩畫講習所に於ける丸山健策氏講話の概要)

若しそれ正しく眞實ならんには畫家の職を要せず、蓋し撮影器は古今何れの畫家の手腕に比するも更に絶體的に完全なるものなればなり。藝術中には精細に比して更に或るものあり。繪畫にありては形體及線條に比して更に或るものあり。色彩はその一要素たり。活動これその一要素たり。生命香氣、勢力、思想、感情、慾情等、皆これその問題中に入るべきものなり。而して最後にありては總て諸考案を聚めたるものに比して往々更に絶對なる天姿の英才獨特の筆法あり、ブレイク、ミカエル、アンジエロ、ミレー、コロ、ルソー、トロヨンの諸氏はこの最後の性質を有するものにして、吾人その諸作の前に立つや殆ど諸規律を放擲し單にその儘に満足せんとするものなり。如斯はこれ規矩繩墨を脱却したるものにして、その初めは非難紛々たりと雖も遂にこれを規律として仰ぐに至る獨特の筆法にして聰敏の筆力たるなり。繪畫

總實法の一節

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*